

一年間を振り返って

動物応用科学科4年 伊澤 整

野生動物学研究室に入ってからこれまで様々なことを感じ、学ぶことを経て無事卒業研究が終わった。その中で特に印象に残っていることと、自分の大学生活を代表する塾講師のアルバイトから得たことを述べる。

まず、自然に対して研究することの難しさである。研究をするにあたり、研究対象を決める必要がある。自分の研究対象は「里山に生息する哺乳類全般」と広範囲であるが、フクロウやシカなど1種に限った狭い範囲の研究でも様々な角度から考察することが可能で、いずれにしても深い洞察力が必要である。同時に調査地を決定する必要がある。私の場合はこの調査地に悩まされた。約2年間で3回調査地を変える羽目になってしまった。これは研究開始時の仮説の甘さと調査で出てきた結果の読みの甘さ、目的が不明確であったことが主な原因と考える。これらのことから言えることは、調査地の選定をする際に現地の方から対象動物の動態やその土地の特徴など情報収集を事前にしておき、その研究の参考になる論文を読み込むことで、目的を明確にすることである。また、出てきた結果が予想と違うが興味深いものであるならば、目的を変えることができる柔軟な判断も必要である。私が卒業研究に使ったデータは結局3カ月分しか使えなかった。これは自分にとっては非常に残念なことである。自分の調査期間は延べ1年3カ月であるが、最終的にはその2割分しか使えなかったことになる。これから研究を

始める室生には、このようなことが起きないよう調査準備をしっかりと行ってもらいたい。

次に考察の難しさと重要性である。現在は調査結果を統計にかけたり、関数を使ったりすることでデータの傾向が出てくるが、それで考察がすぐにできるわけではない。大学の授業では、統計を「目的」として教わったが、研究は「手段」として使いこなす必要がある。また、今までしてきた考察はほとんど結果が予想できるもので、考察するポイントを絞ることができ、研究の「考察」と比較すると難しくくない。しかし、研究は自然相手であるがゆえに、自分が予測できる範囲を超えた結果が出てくることがある。様々な角度からのアプローチとそのための統計方法の検討が必要になってくる。

話は変わって、私は大学4年間で塾講師というアルバイトに捧げてきた。就職先も同じ会社であり、「教育」を生涯の職とする。そこで最近特に感じていることがある。自分で考える力が身につけていないのだ。考える力は考察力や洞察力に通ずるものであり、中学・高校・大学受験だけに必要な能力ではなく、今回私が経験したように大学の卒業研究・卒業論文になくはない能力である。ひいては日常生活でも必要な力であるとも言える。自分が生徒の頃は、理科や社会でデータ結果の図表を読み取り、問題に対する正解を出すような読み取り問題を解く時のみ必要であると考えていた。しかし、考える力は様々な状況で必要であると気付いた。塾講師として

教える側の経験をしたことや卒業研究を経験したことで、塾講師からは相手を思いやる力、最近よく言われる「空気を読む力」に繋がるし、卒業研究からは教科を超えて普遍的に必要な能力であると感じた。

これから研究をする方には前述のことを踏まえて研究の難しさを乗り越え、楽しさに到達してもらいたい。また、私は教育に携わる者として、自ら考える力を生徒に身につけて

もらうにはどうすれば良いのか考え、実践していきたい。卒業研究を浅はかに捉えると学位をもらう目的になってしまうが、高槻先生を始め野生動物学研究室で2年間を過ごしたことと、塾講師の経験から自ら考える力の持つ多面性に気づくことができた。大学4年間は本当に実り多いものであり、これからこの経験を糧に次世代の人材育成に奮闘して参りたい。